

ラジオ放送  
＜令和元年10月～12月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.429



## もくじ ~ contents

### <あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えします。

- 第1回 障害のある人は可哀想？／子の不登校 *page 1*
- 第2回 金光教の修行／結婚したい！ *page 5*
- 第3回 夫の肥満／人が生まれてくる意味 *page 9*
- 第4回 神様がいるならなぜ？ *page 13*  
／子どもをのびのび育てたい

### <先生 & 信者さんのおはなし>

☞ 金光教の先生や信者さんのお話です。

- 祈られていたのは、私でした（信心ライブ） *page 17*
- 一滴のしずく *page 21*
- 私が未熟児で生まれたわけ（信心ライブ） *page 25*
- 5本の指（信心ライブ） *page 29*
- もう一度生まれる *page 33*
- おにぎりの味（信心ライブ） *page 39*
- コミュニケーションが苦手だった私が… *page 43*
- 加治木の土になれ！ *page 47*
- 誕生日を大切に（信心ライブ） *page 51*

## 「障害のある人は可哀想？」

### ／子の不登校」

おはようございます。大阪府枚方教会ひらかたの四斗しと  
晴彦はるひしです。

今日はまず、40代の女性・Aさんからのご質問です。

障害のある人を見て可哀想と誤ってしまいませんか。可哀想と思うこと自体が失礼なのではないかと思うのですが、障害を持っている人は不幸なのでしょうか？

このようなご質問です。

3年前、多くの障害者が殺されてしまうという痛ましい事件があったことは記憶にも新しいところでは。その事件の後には、「障害者は不幸なんかじゃない」「障害を抱えていても、本人も家族もこれだけ幸せですよ」という多くのメッセージがあふれ、私も「そうだよなあ」と共感したものです。しかし同時に、障害者は不幸であるとか、幸せであるとか、そのように第三者が感じたりすることは、どこか障害を特別に見ている自分に気付かされたんです。Aさんと同じような見方をしていたんですね。

昨年私は、知的障害のお子さんを抱えたある男性の講演会に参加し、そこで語られたことにすぐ納得したんです。それは、その講師がお子さんと一緒に回転ずしを食べに出掛けた時の

話です。子どもが貝のおすしばかりを手を取っ

ておいしそうに食べているので、この子は貝が好きなんだと自分は思い込んだけれども、違う日にまた回転ずしに行くと、今度はその貝のおすしには全く興味を示さなかったというんです。そこでお父さんは気付きます。当然、誰もがその日の気分によって、何を食いたいかは変わるわけです。障害を抱えていてもそれは同じことで、当然、その日の感情や気分があつて、日によってそれは変わるわけです。

あるドキュメンタリー番組で、障害を抱えた我が子を介護しているお母さんが、どうしても「障害者イコール笑顔」というイメージで見ようとする世の中に対して、「普段は笑っていないことも多いし、体調によっても違います」と

語っていたことを思い出しました。

私の教会にも、知的障害の女の子を抱えたお父さんが、よく2人でお参りなされます。私は、いつもニコニコしている彼女しか知りませんが、お父さんにお話を伺うと、機嫌の悪い時には教会には連れてこれられないし、一日中暴れまくる時もあることを教えてくれました。

障害を抱えていようがいまいが、同じ人間なんです。幸せな気分になったり、不幸せな気分になったり、どちらでもなかったり。ただ特性が違うだけなんです。大切なことは、一人ひとりの違いを理解し合い、支援し合っていく取り組みが必要なのではないでしょうか。

次は、同じく40代の女性・Bさんから頂いた

お悩みです。

息子が小学校で担任の先生との相性が悪く、不登校です。どうしたらいいでしょうか？

このようなお悩みです。

Bさん、はじめまして。この内容だけでは、どんな状況で、これまでBさんがどのように取り組まれたのか分かりませんが、随分と心を痛めておられることとご推察します。学校とも相談され、不登校をサポートする団体なんかも利用し、不登校経験者の声をインターネットや書籍なんかでたくさん読まれたんではないでしょうか。

その上で、宗教がどのようにこの問題に答え

てくれるのかをお聞きしたいものとして回答しますね。

息子さんが担任の先生と相性が悪いんですね。学校に行かなくなってしまうぐらいですから、相当に息子さんは思い悩んでいることでしょう。ですから、「学校に行つてほしい」という親の思い、それが息子さんをさらに苦しめることにならないようにしてあげてください。息子さんの心の内に、しっかりと寄り添ってあげ、一番の味方でいてあげるのが第一です。

そして、「学校に行つてほしい」という思いがおありなら、それはなぜでしょうか。学校に行つてないと将来が不安で…。当然、そう感じるかもしれませんが。でも、学校へ行きさえすれば立派な人生を送れるとは限りませんし、何が

立派かも知れませんが、本人が何か好きな道を見つけて楽しく生きていくことができれば十分です。どうしたら学校へ行ってくれるのかを考えるのはいったんやめて、「学校へ行かない道もありだよ」ぐらいの方向を見てあげてください。世の中の常識にとらわれない、それが宗教的な構えです。

それに本当に担任の先生との相性だけが原因なら、クラス替えがありますし、気楽にその時を待てばいいのではないのでしょうか。焦らないことです。

といっても、人間、そう簡単に感情をコントロールできるわけではありませんので、少しでも心を安定させるために、同じ悩みを共有できる人とのつながりを持つことは大事です。どうし

ても苦しい、つらい時には、各地の金光教の教会には、悩みを聞く教師がおりますから、一度訪ねてみるのもいいですよ。不登校の専門家ではありませんが、宗教者といろいろな話をする中で何か大切な気づきを得られると思います。

Bさん、どうか自分自身を責めず、息子さんも責めず、ここからの展開を見守っていきましようね。

## 「金光教の修行

／結婚したい！」

おはようございます。金光教あきぎ麻布教会の  
松本信吉まつもとしんきち、51歳です。

大阪府にお住まいの40代の男性、ペンネーム  
「はるくん」さんから、次のような質問を頂きました。

宗教で「修行」というと、飲まず食わずで過  
ごしたり、険しい山道を歩くようなイメージが  
ありますが、金光教の「修行」について教えて  
ください。

このようなご質問です。

はるくんさん、ご質問、ありがとうございます。  
す。

私も先日、山の中で修行される、お坊さんの  
ドキュメンタリー番組をテレビで見ました。本  
当に、すごいですね。山道を駆け巡り、断食、  
断眠など、よくこんな修行ができるものだと思  
心しました。

金光教祖の弟子に近藤藤守こんどうふじもりという先生がいま  
した。当時、まだ若かった近藤先生は、すでに  
人を助ける働きをしていましたが、「こんな不  
徳な自分ではたくさんの人を助けられない」と  
責任を感じ、「山に入って修行させていただき  
とうございますが、いかがなものでしょうか」  
と、教祖様に質問しました。

それに対して教祖様は、「せよ」とも「する



な」とも言われず、「山に入ったらどのようなようにして修行をするのか。いったいどんな山に入るのか」と尋ね返します。「なるべく深い山に入つて、浮き世を逃れるつもりでおります」と返答した近藤先生に対して教祖様は、「わざわざそんな不自由な山に行かなくても、心の中に山をこしらえて、その中で修行をしたらそれで良い。自分が山に入った心になっていけば、どんな不自由なことがあつても、また家内のこしらえたものがまずくても、決して不足を言うことはいらないであろう」と、ちよつと面白い例えをしています。私たちの日常生活で生まれる不満を、「心の山」、つまり、「山に入つたつもりで。そうしたら、大抵のことは乗り越えられるだろう」というのが金光教の教えなんです。

私も25歳の時、肺炎から肋膜炎ろくまくえんを併発して、1カ月の入院を余儀なくされました。初めは、「どうして、こんな病気になってしまったのか。いつ退院できるのか」と不安ばかりが募りましたが、「このことを通して、『生きる』ということを学ばせてもらえるのかもしれない」「生きてくる間は修行中。火や水の行ではない。起きてくること全てが修行」と受け止めて治療を受けさせていただくことで、心身共に元気になりました。

金光教は心の中に山をこしらえて修行する「心行しんぎょう」、心の行が大切と考えています。あなたにも日々いろんな課題が自分の身の回りに起きてくることと思いますが、それを心の山と思つて取り組む修行をしてみてはいかがでしょう

か？ はるくんさんの修行成就をお祈りして  
ります。

さて、次は岡山県の38歳の男性、ペンネーム  
「ハッチ」さんから。

仲のいい友人が次々と結婚して、1人残され  
てしまいました。私も結婚したいのですが、若  
い頃から女性にモテたことがなく、自信が持て  
ません。でも、結婚したい。どうすれば結婚で  
きるでしょうか？

このようなお悩みです。

私も若い頃、女性にモテず、どうしたらモテ  
るのかと、ハッチさんのように悩んでいました。

まだ金光教教師になる前のことですが、お互  
い彼女のいない男友達とお見合いパブに行っ  
て、見事2組カップルが出来たのですが、その  
後、高いお店でおごらされて、ぼったくられた  
苦い経験もしました。いわゆるサクラだったん  
ですね。そんな調子ですから、あなたのお気持  
ちは本当によく分かります。

でもね、やっぱり人間は中身です。中身を磨  
くことが、自分も相手も幸せにできる最善の道  
です。

勉強でも、仕事でも、趣味でも何でもいいか  
ら、自分のできること、好きなことをトコトン  
やってみる。求めてみる。そうすると、あなた  
自身の魅力がどんどん増してきます。輝いてい  
きます。

「僕は〇〇が得意です。〇〇が好きです」と自己アピールすると、自信が持てて、それに共感した女性が、きつとあなたに興味を持ちます。

価値観が近い人といろんな話ができれば、その人がどんな人か、良い人か悪い人か大体分かります。よくよく相手のことを知った上で、自分がこの人ならと思ったらアタックしてみてください。そこから先は、神様をお願いしてあげば、きつとうまくいきますよ！

私も、そんなこんなで、今は素晴らしい女性と出会い、結婚して、子宝にも恵まれ、とても幸せです。

君子危うきに近寄らず。ハッチさんも、くれぐれも怪しいお店には近寄らないように、あなた自身を大切に、あなた自身を成長させて幸せ

をつかみ取ってください。素晴らしい女性との出会いをお祈りしております。

今日もあなたにとつて、よい一日であります

ように。 HAVE A NICE DAY!!

「夫の肥満

／人が生まれてくる意味」

おはようございます。私は兵庫県三木教会みきの  
片島齋弘かたしまさひろです。よろしくお願ひします。

最初に60代女性の「マサ子」さんからのお悩  
みです。

私の主人は数年前、会社を定年退職しました。  
元々無趣味な人だったので、定年後、家の中に  
いることがほとんどで、最近すごく太ってきま  
した。「このままだと病気になるのではないか」  
と心配です。少しは体を動かしてほしいと思う

のですが、どのようにアドバイスをしたらいい  
でしょうか？

このようなお悩みです。

まず、ご主人には、長年の勤務お疲れ様でした。  
また、それを支えたマサ子さんもお疲れ様でした。  
どこまでも、ご主人を思う優しい心からのお悩  
みだと思いました。

先日こんなことがあったんです。私が奉仕して  
いる教会に、30代後半の男性が禁煙をしたいとい  
つてお参りにこられました。私は、その方が禁  
煙できるように一緒にお祈りをしていたんです  
が、なかなかうまくいきません。今日こそはと、  
持っているたばこを教会に置いて帰るんです  
が、帰り途中の自動販売機で買ってしまおうとい

う始末でした。

それが、ある日のことなんです、その方は5歳になるお子さんと一緒にお参りになられたんです。すると、そのお子さんが、神様に手を合わせながら、「どうぞ、お父さんがたばこをやめませうように。病気になりませんように」って声に出してお祈りしたんです。

その言葉を聞いたお父さんは、子どもがこんなことを思っているのかとビックリしていました。その日以来、「この子のためにたばこをやめよう」と思いを改まると、あれだけ無理だった禁煙がいとも簡単に成功したんです。

そこで、私なりの答えになります、どんなアドバイスをしたら良いかというより、マサ子さんの一番の願いは、「主人が病気になりませんよ

うに」ということですよね？

アドバイスというのは、言うタイミングや、相手の機嫌とか、相手が聞いてくれる条件が整わないと聞いてもらえません。言われると嫌になるという人もいるくらいです。なので、どんな言葉を掛けるかよりも、「どうぞ、主人が病気になりませんように」と願いながら待つてみてはどうでしょうか？

さつき紹介した、禁煙に成功した人も、禁煙を願っていくことで、子どもの思いを知り、それがきっかけで禁煙に成功しました。その方にとって、は思いも掛けないことだったと思います。

神様が禁煙できるように、子どもの思いを聞かせてくれたのかもしれない。なので、願って行く中で、アドバイスをする最高のタイミング

グが来るかもしれないし、アドバイスしなくても、ご主人が思い立って運動し始めるかもしれませんよ。私はそういう働きがあると信じています。

マサ子さんのお気持ち、伝わるといいですね。ここからもお祈り申し上げます。

次は、20代男性からのご質問です。

**金光教では「人がこの世に生まれてくる意味」について、どのように教えられていますか？**

このようなご質問です。

私もこの問いについてよく考えさせられます。

まず、ボールペンを例にあげてみますね。ここにボールペンがあるとします。このボールペンはお箸として使ったり、人を刺したりするために使うものではありません。字を書く時に一番力を発揮するんです。なぜなら、ボールペンは、人が字を書くために作ったものだからです。では、「人間は？」ということですよ？

そのことで思い出すことがあります。

私は中学生の時、阪神淡路大震災に遭いました。家は全壊し、大変な状態だったんですが、姉から、「避難所へ炊き出しのボランティアに行かないか」と誘われました。自分の所も大変なのにという気持ちでしたが、姉の言うとおりについて行きました。

ある日、豚汁をお椀につき、待っていた方に

渡しました。その時、「ありがとう。あなたの  
おかげで心まであつたまるわ」と笑顔で感謝さ  
れました。私は、何とも言えない喜びを感じ、  
心が満たされました。その時、人のお役に立つ  
ことは、自分の心も生き生きとし、自分も幸せ  
になることなんだと実感しました。その日から、  
ボランティアに行くことがすごく楽しみになっ  
たんです。

この、お役に立てた時、無意識に何とも言え  
ない喜びを感じたのは、人のお役に立つことが、  
人としての使命だからではないかと思えます。  
ただ、お役に立つと言っても、いろんなこと  
があると思います。

先日、私の教会でも、深刻な悩みを抱えてい  
る方に、3歳になる娘が笑顔いっぱい、「こ

んにちは！」とあいさつをしました。すると、  
その方にはこつとされ、「ありがとう。元氣も  
らったわ。久しぶりに笑った」と涙を流されま  
した。3歳の子どももお役に立てるんですね。

このことから、どんな人でもお役に立てる、  
どんな人でも人に力を与えるぐらいすごいもの  
を持っているんだと思っただけです。お役に立た  
せてもらいたい！ 私もその心を忘れず生きて  
いきたいと願っています。

金光教の教会は、みんなのお役に立たせても  
らいたくて開かれています。このような質問を  
持つてこられても結構です。何かありましたら、  
どうぞお気軽にお参りください。どうぞお役に  
立たせてください。ご質問ありがとうございます。

「神様がいるならなぜ？」

／子どもをのびのび育てたい」

おはようございます。岡山県おく久教会こほの小林こばやし眞まこと、69歳です。よろしくお願いします。

最初は、名古屋にお住いの30代の男性、「拓也」さんから。

本当に神様がいるのなら、なぜ天災が起こったり、事故で亡くなる人がいるのですか。金光教ではどう考えているのでしょうか。

このような質問です。

最近、地震や大雨による災害、多いですよね。

交通事故も。できれば誰も、災害や事故なんかに遭いたくない。でも、悲しいことに、いつもどこかで災害や事故は起きています。

拓也さんは、「神様は全知全能のはず」、そう考えているのでしょうか？ 神様はどこか、私たちとは離れた所にいて、どんなことでも自由にできて、私たちの生活を支配している、そんな感じでしょうか？ だとしたら、拓也さんのような考えになるのは仕方ないのかもしれない。でも、金光教の神様は少し、いえ、大いに違うんです。

金光教では、「天地が生きているから、全ての生き物は生きていられる。明るく暖かい太陽の働き、恵みの雨、多くの物を育んでくれる大



地。私たち人間だけでなく、生き物はみんな、その天地の生きた働きを受けて生活している。昔から変わらないその天地の姿、働きこそが神様そのもの。天地が生きているからこそ、私たちは生きていける」、そう教えられているんです。でも時に、残念ですが私たちの望まないことも起きてきます。

私の住んでいる岡山は災害が少ない県と言われていました。ところが去年、その岡山でも、天からの恵みであるはずの雨を受け切れず、悲しいことに多くの家が水没、多くの犠牲者が出てしまいました。

被災地に住む私の知人は、命だけは何とか助かったんですが、住んでいた家だけでなく、財産の全てを一夜にして失ってしまいました。気

の毒で、私は掛ける言葉がありませんでした。

地震も同じです。どこでどんな大きな地震が起こるやら分かりません。私たちの生活は拓也さんも知っての通り、実はずっと昔から地震や洪水など、災害を繰り返してきた歴史の上にあるんです。

それでも、たとえどんなことが起こっても、神様はいつも私たちのすぐそばにいて、私たち人間を生かそう生かそうと働いてくださっているんです。でも、操り人形のように私たち人間を自由に操って支配するようなことはしません。ですから事故も起こってくるのでしょうかね。私たちは、その神様の「生かそう」「助かってほしい」という願いをしつかり受け止めて、前を向いて生きていきたいものです。

拓也さん、もし神様のことがもつとお知りになりましたか。遠慮なく近くの教会へ立ち寄ってみてください。

次は京都にお住いの「シングルマザー」さんから。

私は30歳のシングルマザーです。本来なら小学校に上がる年齢の男の子が1人いるのですが、のびのび育てたいと言う教育方針で、学校に行かせていません。息子は明るく育っているのですが、周囲から色々言われ、今少し迷っています。

こんなお悩みです。

お母さん、親にとって可愛い我が子が明るく育っている、これほどうれしいことはないですよ。

ところでお母さん、この内容だけでは詳しいことは分かりませんが、お子さんをのびのび育てたいという理由で学校に行かせていないそうですが、学校に行かせたくない、何かご事情が  
おありなんでしょうね。

お母さんは学校についてのどのようなイメージをお持ちなのでしょう。ご承知のように、学校は、子どもが大きくなって、将来社会へ出た時、困ることがないよう準備するためにあるんですが、それはただ読み書きの勉強をするだけでなく、集団生活を通して、人と人との関係を学べる場所でもあるんです。人間は決して一人では

生きてはいけません。人のお世話になり、また人のお役に立ち、お互いに助け、助けられながら生きていくのが、人間の社会なんですから。

今、お子さんが何をして一日を過ごしているのか分かりませんが、いつか社会へ出ていく時がくるはずですから、それを考えると、少し心配になるんです。いざ社会へ出た時、ただのびのび育ったというだけでは、困ることが起きやしないかと。

金光教の教祖様は、元はお百姓さんでした。そのこともあってか、子どものことを「若葉」と呼び、特に小さな子どもの成長を願っていました。植物でも、苗の時期が特に大事だということなんでしょうか。

お母さんも学校について少し迷っているそう

ですが、もしお子さんに、学校へ行ってみたいという素振りが少しでも見えたら、その時は思い切って、1回行かせてみてはどうでしょう。学校では煩わしいこともあるとは思いますが、その逆に、楽しいこともたくさんあると思いますよ。

学校へ行ってみて、それでも本人が行きたくないようなら、そこでまたどうするか考えてみるというのはどうでしょうか。今は義務教育の代わりになるフリースクールなどもあるようですし、選択肢はいろいろあると思います。どうぞお母さん、お子さん共々先々の助かりにつながりますように、お祈りしています。

《信心ライブ》

「祈られていたのは、私でした」

おはようございます。

今日は、静岡県・金光教新居教会あらいの加藤貴雄かとうたかおさんが、平成30年10月10日に金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

昭和40年6月12日のことあります。小学校4年生の時に、私の父が、何の前触れもなく突然亡くなったのです。38歳でありました。

私は、父の遺体が安置された部屋で、ぼうぜんと立ちすくんでいました。前の晩に一緒にお風呂に入った父が、突然亡くなってしまったの

です。この事実を受け入れる間、私の頭の中は真っ白でありました。

私の持つて行き場のない悲しみの心は、神様に向けられました。私は神様に何度も訴えました。「なぜ私の大好きな父が、こうも早く死ななければならなかったのでしょうか。他だっていっぱい人はいるでしょ。世の中悪い人だっていっぱいいる」。神様に対して、なぜという疑問を持ち続けることになりました。その頃から、私はひねくれた性格になり、物事を冷めた目で見るようになっていきました。

幼い頃に父親を亡くした経験は、その後の加藤さんの人生に影を落とします。自暴自棄になり、非行の道に走りそうになったこともありま

した。

それでも、周りの人たちに支えられてどうか立ち直り、結婚を機にようやく明るさを取り戻すことができました。

そして、加藤さんが36歳の時…。

平成3年のことです。私の長女が小学生の時、小児ぜんそくを患いました。症状は重く、窒息死しかけたこともあり、私たち夫婦は神経質になっていました。

長女の下に3人の兄弟があり、一番下の三女がまだ手の掛かる時期でもありましたので、夜は長女以外の子どもたちは家内が面倒を見て、長女は私が看病することになりました。

長女は、ほぼ毎日、夕方頃からぜんそくの発

作が起きます。軽い時もありますが、重症状が続く時もあります。そのような時は気管支拡張剤を飲ませるのですが、すぐに効き目が現れるわけではないので、発作が治るまで長女の近くでご祈念をします。

ご祈念をするとはいっても、その祈りの中身は、「この苦しみは、いつまで続くのだろうか」とか、「大きな発作が起こってきて、死んでしまったらどうしよう」とか、不安と心配な心でいっぱいになっていました。「神様何とかしてください。病気の根切れのおかげを下さい」というようなことばかりをお願いしていました。1週間ほど、夜、発作が起こっておりましたので、ろくろく眠れていない日が続いたある日のことあります。その日の晩もやはり発作が

起こり、薬を飲ませ、効き目が現れるまでご祈念をしていました。

私はご祈念をしながらも、寝不足でついうとうとしてしまい、その時夢を見ました。その夢は私が幼かった頃、熱を出して布団で寝ている時の夢でありました。私の枕元で、父が一生懸命に、私が病気から回復するように祈っている姿の夢を見たわけです。

それで私ははっと目が覚め、気付きました。私は我が子の病気のことでも心を痛めているが、実は私も親に心配を掛け、今の私のように寝ずの看病や祈りを受けていたのだ。自分一人が苦しんでいるように思っているが、そうではなく、今祈っている私を祈ってくださいているお方がおられる。祈られているのは自分の方だ。その

ように思えると、心の底からありがたいという気持ちで湧いてまいりました。

親にならせていただいているから、子どものことを心配できる。様々なことにおかげを頂いていると、ありがたいことが次々と思い起こさせていただき、気が付けば涙を流しながら、「ありがとうございます。ありがとうございます」と神様にお礼を申しました。すると不思議なことに、温かいものに包まれ、いつまでもいつまでもご祈念をしていただく仕方がない気持ちになったのであります。

そして、その日を境にして長女の発作は起らなくなり、真に病気の根切れのおかげを頂きました。神様は私の大好きな父に姿を変え、「祈られているのはお前だぞ」と教えてくださった

のだと思います。

いかがでしたか。

どうして自分の父親がこんな早くに死ななければならなかったのか。それは、答えの出ない問いでした。そして、答えがないと分かっていたらこそ、なおさら問い続けずにはいられなかったのでしょうか。

そんな加藤さんにとって、夢に見た亡き父の姿は、神様からのメッセージと映りました。

姿形はなくなっても、今もお父親が祈ってくれているという実感は、神様がここまでの人生、ずっと共に歩み続けてくださったという確信になったのです。

どんな時でも、神様がすぐ隣に寄り添ってく

ださっている。その心強さを感じさせられました。

《信者さんのおはなし》

「一滴のしずく」

ナレーシヨン

千葉教会に参拝している青木吉子あおきよしこさんは、大

学、実業団と、バレーボールで心身を鍛え頑張ってきた、ハツラツとした女性です。大学の時、柔道部だった彼と出会い、その後結婚しました。けれども、夫のある問題で、心も体も傷付き、夫婦の危機が訪れました。その時のお話を伺いました。

青木

結婚して、私自身も13万円くらいお手当を頂

いて、主人のお給料も頂いていたので、金銭的には全然問題なかったんですけど。主人がパチンコ好きで、営業をやっていたので、外に出ると時間潰しにパチンコをするわけですよ。それでお金をクレジット会社から借りる。1日で4万円とか。そういうのが月でもう10万円になってしまったりとか。

勝ったらこっちは戻ってこないんですよ。無くなった時だけ、「くれくれ」って言われて。でも、すごくイライラした顔して帰ってくると、「ああ負けたんだな」って分かるし。ただ楽しんで行くならいいけど、負けた時にイライラした顔されるのは最悪だと思ってました。



ナレーション

吉子さんは、親に心配を掛けたくなかったの  
で、ずっと誰にも言わず我慢していました。し  
かし、当時幼稚園だった長女の前で、食器棚の  
ガラスを壊すような激しい夫婦げんかをし、長  
女はチック症になってしまいました。それをき  
っかけに、実家の両親に初めて打ち明けました。

青木

両親からは、「結論を出す前にちょっと離れ  
た方がいいんじゃないか」と言われました。そ  
れで1年間、実家に帰らせてもらって、その時  
にうちの父が即、「日参しなさい」って言った  
んですよ。

私は、父が鬼だと思いました。苦しくて苦し

くてしょうがなくて、外にも出たくないのに、  
誰とも会いたくないうつ状態なのに。願いたく  
もない、願うのが一番苦しいって言うてる本人  
にお父さんは「日参しなさい」と言うんだって  
思ったけど……。でも、言い返せなかったとい  
うか、やっぱり自分の中で親不幸をしているなと  
思ったので、だから自分のためにじゃなくて、  
両親に安心してもらおうためにお参りをしまし  
た。

だけどお参りすると、毎日必ず教会長先生が、  
「吉子ちゃん、元気な心で、信心させていた  
きましようね」と必ずひと言だけ掛けてくださ  
いました。

ある日、その先生が目を真っ赤にされて、「教  
師という立場であれば、『信心しておかげを頂

きましようね』と言ったのが私の役目なんだけど、でも、これまで頑張ってきた吉子ちゃんには、そう言うのは酷だわね」って言われたのがきっかけで、肩の荷がすーっと解き放たれました。

そこに先生が掛けてくださった言葉によって、「あつ、自分がお参りをさせていただいているんだ」という思いに変わった瞬間だったと思います。両親のためと思っていただけ、でも先生はずっと私のその姿を見ながら願ひ続けてくださっているんだという、そういう思いに触れた瞬間だったと思います。

当初は、祈ることも願うことも、逆に祈られることも願われることも苦痛でした。「かなわない。通らない」と思っていたから。「何で神様は願いを聞いてくださらないんだろう」とい

う思いが募ってきてしまうんです。

でも、それがきっかけで、何となく水滴がぼたって垂れたのが、ふわっと色が変わるといっか、どれだけ何を注がれても真っ黒だった水がいきなり白くふわっと変わるといっか、不思議な感覚でした。そういう瞬間でした。あれは一生忘れられない。

時間があれば考えてしまう。でも、それを神様にお預けして、後は大らかな気持ちで過ごさせてもらおうという思いに変わりました。

それでも夫といくら話しても平行線が続いていました。そのことをお取次を頂いた時に先生が、「それはね、言いたいことを言おうとしても、相手の状況が最悪の時に言ったところ、感情的なものしか伝わらないよ。とにかくそれ

は神様にいったんお預けして、『言わせていただく時節をどうぞ神様、頂けますように』という願いに变えていきましよう」とおっしゃいました。

相手を責めたところで、理解はし合えないんだなと思いました。自分自身の心をすつきりさせたかと思ってる時というのは、相手を責め立てる心しかなくて、そう思っている時にいくら口論しても結局は平行線にしかありません。でも、どんな悪いことでも相手の目線で考えて、妻の立場でなくて全く違う人の立場で考えた時に、初めて責め立てた気持ちより、まず相手を分かってあげる、理解してあげるといふ気持ちが生じる。腹の立つ気持ちが不思議と収まる。不思議と話が交わるようになりました。

ナレーション

いかがでしたか？

一滴のしずくが吉子さんの固い心をほどき、神様に全てをお預けする気持ちになれました。

そして、相手を責める気持ちが消えていきました。

その後、思い掛けず吉子さんのご主人が仕事で上海へ行くことになりました。このことをきっかけに、吉子さん夫婦は再スタートを決め、新天地で温かい家庭を作り上げていくことになりました。

《信心ライブ》

「私が未熟児で生まれたわけ」

おはようございます。

今日は、金光教鶴町教会つるまちの藤坂金生ふじさかかねおさんが、

平成31年3月、京都で開催された集会で、お話しされたものをお聞きいただきます。

藤坂さんは、42年前、1450グラムという未熟児で生まれ、3カ月の間、保育器で育てられました。我が子を抱くことも、お乳をやることもできない。どれほど両親はつらい思いをしたことだろうと藤坂さんは振り返ります。

当時24歳の母、まだ当時父は25〜26歳ぐらい

です。なぜ信心してるのに、なぜ神様にも願っているのに、こんなことが起きたんやろうなって、そんな気持ちにならんかったんかなと、両親には聞いたことはないんですけど、私は思いました。どんな思いやったやろうなって。一生懸命信心しますし、神様にもお願いしているはずなのに、「なぜこんなことが起きたんやろうな」って疑わんかったかなあと思いました。

その私が生まれてから1年半後、私が1歳半の時、今度は母親がくも膜下出血で倒れました。脳の血管が破裂して倒れてしまったのです。どうも助かるかどうか分からん。そんな病気です。大病であります。

その時、私の妹が母のお腹にありました。そういう中、お医者さんに、「どっちを選びます

か？」って聞かれるんです。「子どもか、母親の命か、どちらか一つしか助けることができません」と言われたそうです。

父は、ご本部にすぐに飛んでいき、お取次を頂いたそうです。当時は四代金光様でした。「そういう中でも、25年間、そのことにお礼を申しましょう」ということを言われたそうです。「何がお礼やねん」と父は思ったそうです。「助けてくれ。どうしたらいいって言ってるのに、何がお礼や」と思ったんですけど、ぐっとその言葉のみ込んで、「ああ、あいつを助けなあかん」と思ったそうです。妻をね、母親を。「妻は今までの人生25年生きてきたけど、本当にその人生にお礼を申せたんかなあ。人間死ぬ時に自分の命にお礼を申して、本当にそういう心で

亡くなっていく。そんなことでないといかんなあ。あいつはまだそれができてない。まだ生きなあかん」と思ったそうです。

そしてもう一つ、母親を選んだ理由は、私だったそうです。私に母親がおらん、そんな子どもにしたら可哀想や、あかんと父は思ったそうです。そして、お腹の赤ちゃんを諦めるという選択をしました。

このくも膜下出血の時に、いろんなことが分かるんです。でも、父親はどんな気持ちやったんやろなって思うんですよ。私が未熟児でね、神様をお願いしてても、そんな大変な苦難、試練が待ってた。そして今度は妻がくも膜下出血で倒れる。ましてやお腹に子どもがいる時です。「神も仏も無いんかなあって。親父はそんなこ

と思わなかったんかなあ」と思います。それで

も手術を決めましたので、お医者さんといろんな話を進めていくんですね。お医者さんが、「奥さんはどんな方でしたか」と、いろんなことを聞いてくるんです。私の母の病気は、生まれながらに脳の血管に奇形がある。生まれた時から、ずっと時限爆弾を脳に抱えているような状態で生まれてきてたんですって。ちよっとくも膜下出血の中でも特別な病気だったそうです。その中で母は育ってきたんです。

「妻は、運動とか、ようしてたんです」

「えっ、これは、走ったり激しい運動をして息が上がる、心臓がバクバクする、それだけでも破裂する可能性があるんですよ」

「えっ、そうなんですか。妻は学生時代、剣

道してたんです」

「剣道ですか！」

あれ、「めーん」いうて頭を打ちますやんか。

「そんなことしてて破裂しなかったんですか」とお医者さんが驚いたんです。そして、「剣道もそうなんですけど、妻は出産もしてますけど。長男を出産してますけど」って言うたら、「考えられません。この病気を持ちながら出産をする。出産の時に、いきんでバーンって破裂します。そうなったら、お母さんもお腹の子どももどうなってたか分かりません。これは奇跡ですよ」。そんなことを話してくれたそうです。

その時に父親が、「ああ…私がね…：1450グラム。片手に乗るぐらいの小さな赤ちゃんとして生まれてきた理由があったんや。神様が守

ってくださってたんや」って、そのことに気付いたそうです。「お医者さんが教えてくれた」と、そう言っております。私が30000ぐら

いの大きな赤ちゃんとして生まれてきていたら、その時に破裂してたかもしれない。1450という小さいままやから、スルツと生まれたんかもしれない。当時、「何で我が子が、こんな泣くこともできん箱に入らなあかんのや」と思ったかも知らんけど、そこにも最善の、最高のお祈りを頂いて守られての自分たちやったんだということを、父は教えてもらったそうです。

いかがでしたか。

藤坂さんは、神様をお願いしても願いがなか

なかかなわらない時、このことを思い出し、きつと神様がお守りくださっているから大丈夫だと思り返すそうです。

ラジオをお聞きの皆さんも、つらいことや苦しいことが起きた時、神も仏もあるもんかと思うような時、このお話を思い出していただければと思います。

《信心ライブ》

## 「5本の指」

おはようございます。

今日は岡山県浅口市にある金光学園中学高等学校の校長、金光道晴こんこうみちはるさんが、平成31年2月22日、金光教本部でお話しされたものをお聞きいただきます。

私たちは人と自分との違いを受け入れられなかったり、認めることができなかつたりすることがしばしばございます。それ以上に、自分との考え方の違いを非難したり、攻撃したりするようなこともあります。

例えば、いじめの問題がそうであります。いじめのきっかけになることに、力が弱い、動作が鈍い、性格や意見が合わないなどということがあります。私は生徒に次のように問い掛けます。速く走れる人とそうでない人はどちらが尊いか。勉強ができる人とそうでない人はどちらが尊いか。音楽ができる人と体育ができる人、背の高い人と低い人、太っている人と痩せている人、肌の色が黒い人と白い人、どっちが尊いですか。それらの違いは人間の尊厳には全く関係のないことで、その人の特徴であります。特徴や違いによっていじめるなどということは絶対にあってはならないということを話すようにいたしております。

ある方が教祖様に、「子どもの数が多く、そ



れぞれ性格が違っているので困っています」とお話をしたら、教祖様は、「もし5本の指が同じ長さでそろっていても、物をつかむことができない。長いのが短いのがあるので物がつかめる。それぞれ性格が違うのでお役に立っているのである」と教えられたというお話がございます。違っているからこそ役に立てると教えられているのです。

ひと月ほど前ですが、本校の「学校保健委員会」という会で、LGBTについて研修会を持ちました。その講師としてお話しくださったのは、金光教LGBT会の会長である金光教かりや加里屋教会の井上真之先生いのうえまさゆきであります。Lはレズビアン、Gはゲイ、Bはバイセクシャル。Tはトランスジェンダー。頭文字を取ってLGB

T。性的マイノリティー、性的少数者と言われているのでありますけれども、日本人でいいますと人口の5%から8%いるんだそうです。つまり、学校でいうならば、例えば30人のクラスですと、大体平均すると2人ぐらいがそのクラスにいるということになります。

その講演では、ご自身の体験を元に、大変な悩みや苦しみを抱えながら、誰にも話すことができず苦しんだことなどもお話しくださいましたが、その中で私が最も印象に残った言葉がありました。それは、「性別というと、男と女の二通りと考えられてきたけれども、性は二分できるとはならない。多様なもので、二分するのにはまらない人もいるということを知ってもらいたい」という言葉であります。

しかし現実には、その人たちは自分で表明することができない。従って、いじめられたり、正常ではないと差別を受けたり、周りの人に理解されない中で苦しんでおられるというのです。そして今なお一番理解が及ばないのが、親であったり、大人であったりするのです。

講演の後に座談会がありましたけれども、その座談会の中で、中学3年生の女子生徒が、「自分の身近にもLGBTの人がいますけれども、今日の講演を聞いてそのことがよく理解できました。その人のことを理解してあげたいと思います」と言ったのがとても印象的でありました。

保護者の代表の方は、「頭では理解できたけれども、もし自分の子どもがそうであったら、受け入れるということは難しい」というふうに、

その場で言われます。

この道は、160年前に始まったのでありますけれども、既にあの時代に、違いを認め合うことが大切であるということを、本当に分かりやすくお教えくださっております。例えば、こういう教えがございます。

「どの宗教を信じていてもくさすことはない。みな、天地金乃神のいとし子である。あれこれと宗教が分かれているのは、例えば同じ親が産んでも、大工になる子もあり、左官になる子もあり、商売好きな子もあるというようなものである。宗教が分かれているといっても、人はみな神の子で、それぞれ分かれているのである。そばの好きな者や、うどんの好きな者があり、私はこれが好きだと言って、みな好き好きで成

り立っているのであるから、くさすことはない」というふうに言われております。

最初に申しました、教祖様の5本の指の教えもそうであります。家族の問題はもちろんのこと、いじめの問題、性的マイノリティーの問題、民族や宗教や文化の違いから起こる問題、そして世界平和の問題など、全てはお互いの違いを認め合い、理解し合うことを大切にしていかなければ、決して解決できないというふうに思うのであります。

教育現場での経験を踏まえながら、人間がお互いに違いを認め合うことの大切さについてお話しになっていきます。そして、どうすればその違いを認める広やかな心になれるのか、その手

掛かりとして、「みな神のいとし子である」という教えを紹介されているわけです。確かに、我が子がお互いにけなし合っていたら、親としてはいたたまれないですよ。

紹介された教えの中に、「好き好き」という言葉がありました。宗教の対立さえも、「好き好き」というひと言で神様の愛情の中に包み込んでしまうのですから、金光教祖が信仰した神様は、何て大きいんだろうと驚かされます。

神様の親心に思いを寄せながら、人と人との温かい関わり合いを広げていきたいものです。

《信者さんのおはなし》

## 「もう一度生まれる」

ナレーション

鹿児島県出水市<sup>いずみ</sup>。昭和38年の冬、一人の女の赤ちゃんが生まれました。その母親は、高血圧が原因で大量に出血します。助産師が適切な処置を施し、ようやく出血が治まったものの、体はとても熱く、すぐに冷やさねば命が危ない状態でした。たまたまその日は、南国・鹿児島も雪が降る寒さでした。助産師は、積もっていた雪で体を冷やし、母親の命も無事に救うことができませんでした。その助産師は金光教の信者で、生涯に2千人もの赤ちゃんを取り上げることにな

るのですが、自分の人生を振り返り、この時のことを鮮明に思い出します。うれし涙を流し、神様に心からお礼を申し上げたあの雪の日のことを。

今日お届けするお話は、その日に生まれた女性、阿部<sup>あべ</sup>智子<sup>ともこ</sup>さんのお話です。阿部さんは現在56歳、金光教出水教会にお参りされています。金光教とのご縁は今から約15年前、40歳の時なのですが、更に時間を巻き戻してみましよう。

阿部さんは30歳で結婚しました。しかし、結婚までの付き合いが短かったこともあり気付かなかったのですが、夫は酒飲みで、ギャンブル好きで、借金も抱え、すぐに怒りをあらわにする人でした。

子どもにはすぐ恵まれたものの、いつしか自

分の居場所が見付からないまま、体の具合が少しずつおかしくなっていました。

ナレーション

阿部

自分で言うのもなんですけど、明るさが取りえだった自分が、だんだんだんだん笑顔が無くなっていく。元々あまり太る体質ではなく、どちらかといえば痩せ型だったんですけど、更に

でも、夫の態度は変わらず、ついに子どもが小学校に上がるタイミングで夫と別れ、実家のある出水市に戻ることを決めました。体調を崩してから10年近くが経っていました。

痩せていく。だんだんだんだん痩せていく、笑顔が無くなっていく。それは実感していました。

実家に戻っても体調が優れない中、その様子を耳にしたある人が声を掛けてくれました。

それで私は、何のために働いているんだろうかと思うようになり、夢も希望もない状態でした。

「金光教の教会に行ってみない？」  
それは、あの雪の日、阿部さんを取り上げてくれた助産師さんでした。

ただ、子どもは可愛い、子どもの成長だけが楽しみ、それはあるんですけど、自分自身をどんどんと見失っていく感じがしてました。

あまり気が進まなかったものの、助産師さんの顔を立てるために、一度だけのつもりで教会

の門をくぐりました。当時の出水教会長、  
しまだくにお  
嶋田邦雄先生が迎えてくれました。

阿部

一心に対応してくださいです。そこにす  
ごく心を引かれて：時間にしたらかなりの時間  
だったかもしれません。話をすると、本当にも  
う数時間で私のことを全て分かってくださいた  
ような対応でした。先生の表情とか言葉とか、  
何かすごくありがたいという思いだったんで  
す。

ナレーション

自分をこの世に取り上げてくださった助産師  
さんが、40年経って、また私を取り上げてくだ

さった。阿部さんは、まさにもう一度この世に  
生まれたような気持ちになりました。

この先生にすぎるしかないと感じた阿部さん  
は、その日から毎日教会に通い出しました。子  
どもが学校にいる間はずっと自分の話を聞いて  
もらったり、先生から話を聞かせてもらったり、  
そんな毎日が始まりました。

阿部

とにかく先生はいろんな教えの話をしてくだ  
さるんですけど、もう全部何かありがたくて、  
体の細胞や血液に先生の言葉が全部入っていく  
ような感じがしました。先生が、いつも「良く  
なるから、大丈夫だから」と言ってくださいいま  
ですが、その時の自分の体調にその言葉はすご

くありがたかったんです。教えにある難しい言葉とかではありませんでした。よく言ってくださっていたのは、「末広がりのおかげを受けられる」という言葉で、これは頭に残っています。

ナレーション

それから阿部さんは、薄紙を剥ぐ<sup>は</sup>ように少しずつ体調が元に戻り、3年ほど経つ頃には仕事ができるくらいに回復していきました。

そんな阿部さんに、自身の支えになっている教えを聞いてみました。

阿部

「一生死なない父母に巡り会ったと思って、何事でも無理と思わないで天地金乃神にすがれ

ばよい」。この教えが好きで、自分の心の支えにさせてもらっている感じですよ。あと一つは、大きいお言葉ですけど、「天に任せよ、地にすがれよ」。これは、結構私は、先生からも言われるのですが、取越苦労というかすごく考え込むんです。自分で難儀を作るわけではありませんけど、そこまで考えなくても、というところがあるんです。それなので、ちょっと心を大きく持たせてもらう意味で、これから「天に任せよ、地にすがれよ」というこの教えを支えにして取り組んでいきたいと思っていこうと決まっています。

ナレーション

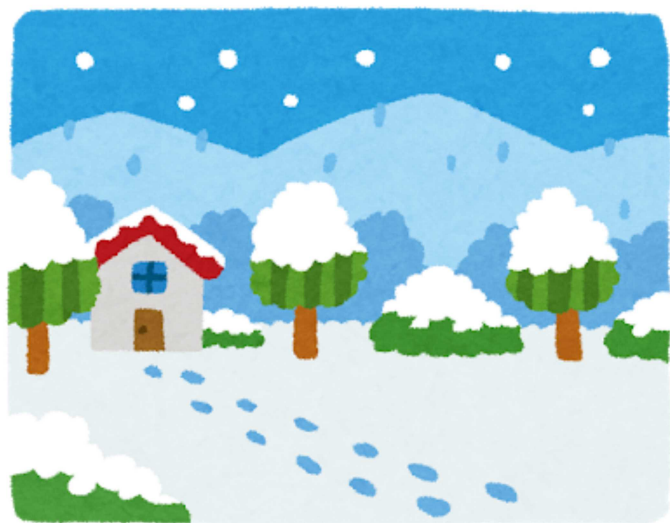
一人の助産師が導いたご縁、そこで一人の金

光教の先生と出会ったご縁。それが阿部さんの  
生きる道を変えました。

今でも一人息子のことを始め、いろいろと悩  
みはあるという阿部さんですが、大きく広い天  
地に身を任せ、末広がりのおかげを受けていく、  
その願いさえあれば大丈夫、彼女の柔らかな表  
情がそう告げていました。







《信心ライブ》

「おにぎりの味」

おはようございます。

今日は、山口県の金光教鹿野<sup>か</sup>上<sup>のかみ</sup>教会、  
おかなりとしまさ岡成敏正さんが、平成28年3月、金光教本部で

お話しされたものをお聞きいただきます。

お話に登場するAさんは、幼い頃にお父さんを戦争で亡くされました。後に残されたAさんと、そのお母さんとのお話です。

このAさんという方は数年前にお隠れになったのですけれども、私が出会わせていただいた時は50代半ばでございました。このAさんは、

「親がないということは、例えて言えば、胸の中に氷が張り付いて、それがどんどん大きくなっていく。冷たくて冷たくて仕方がない。そういう感じでした」とおっしゃっておられました。

お母さんは乳飲み子を抱えて戦後の食糧難という厳しい生活の中、一人で子どもを育てようと思われたそうですけれども、大変なことで、後に子どものためにお商売をされている家にお嫁入りをされました。その商売の手伝いを一生懸命なされるわけでした、なかなか我が子のこと  
に思いを寄せてやれなかったそうです。

一方、Aさんからすれば、今まで自分一人のお母さんだった。そのお母さんが、その家に取り  
られたような気になって、義理のお父さんが心

の中で憎くてならなかった。そういう中で、心が荒んで、非行にも走り、大人になった時には大変な人間になっていた。

そのAさんが、お道の信心に出合わせ、教会に参拝されるようになり、お取次を頂かれ、神様のお話、信心の話を聞かれる中に、改めてご自身のそこまでの歩みを振り返って、文を書かれました。「おにぎりの味」という文なんですけれど、実はここにございますので、ちょっと読ませていただきたいと思います。

### 「おにぎりの味」

小学校5年生の運動会の時のことです。その頃の運動会は町内のお祭りのようなもので大変な騒ぎでした。でも、僕の家は商売をしていた

ので家族が見にくることもなく、昼休みはいつも同じように家に帰っております。

ところが5年生の時の朝、母が、「今日は弁当を持っていくからね」と言ってくれました。とても楽しい一日の始まりです。

そして昼になり、校内のところでワクワクしながら待ちました。しかし、待てども待てども母の姿は見えません。いよいよ昼休みが終わりに近付いた頃、親友が、「自分の家族のところと一緒に食べよう」と話してくれました。その時僕はとっさに、「もう食べたよ」とうそをつきました。とてもつらい、悲しいうそだったのを今でもはっきり覚えております。

しょんぼりしていたら、遠くから手を振りながら走ってくる母の姿が目に入りました。飛び

上がるほどにうれしかった。と同時に、ホッとしました。「ごめん、ごめん」と謝る母の手を引いて、急いで校庭の隅に行き、弁当を広げました。おにぎりを2つほど食べ、卵焼きを食べ始めた。午後が始まりのベルが鳴りました。でも、僕は時間ギリギリまで母と一緒にいました。この時のにぎりめしの味はおいしかった。

子どもなら遅くなった母を責めるのが当然でしょうが、僕はともうれしかった。生まれた時、父はすでになく、僕が5歳の頃、母は再婚しました。幼い心にも、今まで自分だけの母を他人に取られたとの思いが強烈にあり、とても寂しい気持ちでした。そして、初めて母と二人きりになったのが、その時です。校庭の隅で向き合って座った時のおにぎりの味。母の味、二

人だけの世界、夢のような時間です。思い出す度に何とも言いようのない、懐かしい心の古里です。

これからも自分のことだけではなく、家族や周りの人々にもいろいろなことが起きてくるでしょうが、自分の心の中におにぎりの味と母の匂いのするあの時間を忘れない限り大丈夫と思っております。

いかがでしたか。

当時の日本は大家族が多く、そんな中で、Aさんはお母さんと二人暮らし。お母さんはたった一人の家族でした。そのお母さんが再婚したのは、Aさんがまだ5歳の時というのですから、お母さんを取られたような気持ちになっても無

理はありません。だんだんと心が荒んで非行に走るようになったそうですが、それでも本当に道を誤らずに済んだのは、心の支えになるものがあつたから。それが何なのか、そのことに気付いたのはAさんが大人になって金光教に出合つてからでした。

信心をするようになって、「神様は我々人間を『可愛い子ども』として、いつも慈しみを掛けてくださっている」。こういう教えを実感したのでしょうか。改めてお母さんとご自身の関わりを考えるようになりました。すると、思い出されるのはいつもあの味でした。大好きなお母さんが作ってくれた、大好きなお母さんと二人つきりで食べた、その時のおにぎりの味。それはすなわち、お母さんそのものなのですが、

実はそれがずっと心の支えになっていたことに気付いたのです。

皆さんにも心の糧になるような思い出の味、ありますか？

《信者さんのおはなし》

「コミュニケーションが苦手だった私が…」

千葉県の金光教松戸教会まつどにお参りする小口こぐち祐弘よしひろさんは、平成生まれの23歳。家族は祖父、父、母、姉、妹の6人家族です。現在、社会人1年生で、作業療法士として病院で働いています。

患者さんに優しく声を掛ける小口さんですが、子どもの頃は、人とコミュニケーションを取ることがとても苦手でした。

しかし小口さんは、神様から差し向けられた人たちとの出会いをきっかけに変わっていきま

す。

幼い頃から、同年代の友達と遊ぶことより、保育園の先生や大人たちとばかり遊んでいました。小学校に入ってもそれは変わらず、1、2年生の頃は、気に入らないことがあると、授業中でも教室を抜け出すことが何度もありました。いつも先生や親が探し回ります。放課後になってもずっと隠れ続けたこともありました。

3年生になると教室から出て行くことはなくなりしましたが、それでも机の下に潜ったり、掃除道具入れの中に隠れたりしていました。それは人と関わることが恥ずかしく感じたり、できないことがあることを知られるのが嫌だったからでした。

そんな小口さんが小学校4年生の時のことで

す。お母さんのお腹の中に、赤ちゃんがいることが分かりました。しかし、お母さんは高齡出産になるため、赤ちゃんを産むか産まないかを、

教会の先生に相談していました。そんな中、小学4年生の小口さんがお母さんに、「神様に任せれば大丈夫だよ」と言ったのです。その言葉は、お母さんの不安を和らげました。そして妹が誕生しました。

その妹が1歳になる頃のことです。お母さんが出掛けるので、お姉ちゃんと一緒に妹の子守りをするようになりました。ところが、妹が突然、けいれんを起こしたのです。お母さんはいない。おまけに妹の心臓は生まれつき穴が開いていました。小口さんは慌てました。まず妹の頭を冷やしました。お姉ちゃんがお母さんに電

話をしている間、小口さんは、「妹を助けてください」と、神様に一生懸命祈りました。幸い大事に至らずに済みました。

この出来事を通して、妹のお世話をすることの大切さを痛感し、より一層お母さんのお手伝いをするようになりました。この頃から、学校で隠れることが少なくなってきました。

小学校5年生の時、新たな出会いがありました。それは担任の先生でした。今までのように隠れると、その先生から、「それは駄目、もつと周りを見るように」と、初めて注意を受けたのです。初めは、「苦手な先生だな」と思ったのですが、あまりにも熱心に言われるので、「一度言われるとおりやってみよう。やってみて、もし駄目なら、やってみただけ駄目でしたと先

生に言おう」と思い、挑戦してみました。すると、だんだんと友達との会話が増えていき、今までのような恥ずかしさを感じなくなっていました。それ以来、隠れることもなくなりました。

中学では剣道部に入りました。しかし、一人の先輩から厳しく指導され、意見が合わず、「どうしてこんなことを言ってくるのだろう」と思っていたのですが、「いや待てよ。この人が言っていることをやってみよう。もしかしたら、自分のために言ってくれているのでは」と、小学生の時の体験を思い出し、その意見を受け止めてみました。すると、先輩の言うとおり物事が進み、自分を強くしてくれるためだったのだと気付くことができたのです。

小口さんは当時を振り返り、「逃げて隠れていた時は、自分のことしか見えていなかったように思います。妹ができたことと、小学校の担任の先生から、『周りを見るように、自分を抑えるように』と言われたことで、相手の気持ちを分かるうとするようになりました」と語っています。

小口さんは、幼い頃から、家族で教会に参拝する車の中で、おじいさんから金光教のラジオドラマをよく聴かせてもらっていました。「物語の内容が理屈っぽくなく、大らかな神様の温かさを感じるお話ばかりだった」と言います。小口さんは金光教のラジオドラマが大好きで、セリフを全て覚えてしまいうくらい何度も聴いていました。



小口さんが、妹の誕生で、「神様にお任せすれば大丈夫」と言ったこと、先生や先輩と出会う中で、相手の意見を受け入れられたこと。それは、幼少の頃からラジオドラマや教会の先生を通して、金光教の信心に触れていたのが大きな要因でした。小口さんの心の中に、人を思いやる優しさや物事の見方、考え方が育てられたのでしよう。その中で、自分の意見を置いて、相手の意見を受け入れる素直な心が、今につながったのです。神様は、人との関わりが苦手な小口さんに、人と触れ合うことで世の中のお役に立ってもらいたいと願い、そういう人たちに出会わせてくださったのでしよう。

今、小口さんは作業療法士として働いていますが、この仕事を選んだのは、おじいさんが

脳梗塞のうこうそくを患ったことがきっかけでした。

コミュニケーションを必要とする仕事に就いたのも、人のお役に立つことで小口さん自身も成長してほしいとの神様の願いなのかもしれませぬ。

小口さんは、患者さんのことを理解し、患者さんと仲良くなるためにも会話を大事にしています。また、患者さんの治療を始める前には、「どうぞ、この治療方法で助かっていきますように」と、神様をお願いしながら、今日も治療に励んでいます。

《信者さんのおはなし》

## 「加治木の土になれ！」

九州の南部、鹿児島県は錦江湾の一番奥で、目の前に桜島を眺める加治木町。その町にある金光教加治木教会にお参りしている大原安子さん。現在71歳。

東京で生まれ育った大原さんは、金光教の教会にお参りする家庭に育ち、学校の試験があれば、必ず時間割を持って教会に参拝して、神様をお願いしていました。

やがて就職し、職場で知り合った鹿児島県出身の男性と結婚。新天地・鹿児島での生活が始

まりました。夫は金光教の信心をすることを理解してくれて、探してくれたのが加治木教会でした。3人の子どもを授かり、近くに住む夫の両親と、充実した毎日が続いていました。

ところが、結婚して7年目に、突然、夫が胃がんで亡くなるという人生の憂き目に出遭います。自分も夫の後を追って死のうかと思いましたが、3人の子どものことを考え、思いとどまりました。

加治木教会の先生に、今のつらい気持ちや、将来の不安などを訴えると、「親のこと、子どもがあるだろうが、あなたの気持ちはどうかな」と尋ねられました。大原さんは、「実家の兄は、『東京に帰って来ては』と言ってく

れます。でも、夫は生前、『両親は自分がみたい』と言っていたので、私もそうしようかと思つてはいるのですが：」と答えると、「どちらにしても大変。信心しておかげを頂きましょう」と言われました。大原さんは、その先生の言葉が後押しとなり、鹿児島に残ることを決心しました。

しかし、その翌年、義理の父も、息子の後を追うようにして亡くなりました。

大原さんは、当時4歳、2歳、0歳の子どもたちを抱え、内職をしながら女手一つで子どもを育てました。その間、教会へは毎日のようにお参りしました。先生は、時には2時間くらい丁寧にお話をしてくださることもありました。

「先生、そんなに教えられても、なかなか身に付きません」と言うと、「それでよろしい。教えは毛穴からでも入る。何か事があつた時に、おのずと出てくるものなんだよ」と先生に優しく導かれながら、毎日、育児と内職に励みました。

それでも、悲しみはなかなか癒えるものではなく、涙はいつ枯れるのかと思う毎日でした。しかし、そんなある日、ふと風が吹いてくるのを感じました。これまでも毎日風は吹いていたはずなのに、その日、ふと風を感じたのです。その感覚に戸惑っていると、周りの音も聞こえてくるようになりました。そこには、ずっと繰り返されている日常生活の営みがありました。

大原さんは、「ああ、夫が亡くなっても世の中は変わらないんだなあ」と気付いたのです。ここからの人生にしっかりと向き合ってみようと思えた尊い瞬間でした。

夫の三回忌が終わり、少し落ちついた頃、以前、先生が「加治木の土になれ」と言われていたことを思い出しました。「加治木の土になれ」とはどういうことかと思いを巡らせていると、先生から、「今、住んでいるお土地と家を拝ませていただいたら、新しい家を頂ける」とのお話があり、ビックリしました。確かに、独りになった義理の母の家の近くに引っ越したいとは思っていましたが、現実には、定職にも就いておらず、お金もありません。しかし先生は、「10

年でおかげが頂ける」と言うのです。

大原さんはその言葉を素直に受け、毎日家の出入りの時、「お土地さん、ありがとうございますます」と言って地面を拝み、「雨露をしのがせてくださり、ありがとうございます」と家を拝みました。

そして、ちょうど10年が過ぎた時に、義理の母から急に電話があり、「売地があるので見に行かないか」と言われたのです。すぐその場所に向かうと、お義母さんが「ここは、どうかしら。いずれはご先祖からの土地を息子にやろうと思っていたから、それを売って、ここの土地を買って家を建てればいいから」と言ってくれたのです。「ご先祖の土地を売るなんて申し訳

ないです」と答えると、「こっちに変わるだけだからいいのよ」と言ってくれました。それからとんとん拍子に話が進み、家が建ったのです。本当に10年でした。

そのうちにだんだんと、「加治木の土になれ」という言葉の意味が分かるようになってきました。土には、あらゆるものを受け止め、生み出す働きがあります。

大原さんは、教会の先生の教えを受け止め、義理の両親の思いを受け止め、周りの方々との関わりを受け止めてきました。いろいろなものを受け入れ、肥やされたその土に、大原さんは種をまき、そこから根が張り、芽を出し、花を咲かせることができた、そう感じるようになって

たのです。いつの間にか、この加治木の地が、大原さんにとって心の古里になっていました。

今は、加治木で生まれ育った3人の子どもたちも成人し、2人の孫に恵まれ、穏やかな毎日を過ごしています。

きっと、亡くなられたご主人も、安心して錦江湾の桜島のように、片時も離れず、いつも家族を見守っていることでしょう。

大原さんは、「形のあるものは無くなるけど、形のない大いなる神様のお働きは、いつまでも無くならない」と言います。起きてくること全てを「加治木の土」となって受け止め、神様におすがりし、助けられてきたのです。今は本当に、大きな安心を頂いています。

《信心ライブ》

## 「誕生日を大切に」

皆さんは、誕生日を大切にしていますか？

プレゼントをもらったり、ごちそうやケーキを食べたり、みんなにお祝いしてもらえらる誕生日はともうれしいですね。

金光教では、誕生日に神様にお礼のお届けをします。心や体の成長、人として学ばせてもらったことなど、ここまでお育ていただいたお礼を申し上げるのです。

今日のお話は、その誕生日について、金光教本中野教会ほんなかのの浅野善雄あきのよしおさんが令和元年6月2日、東京の麻布教会でお話しされたものをお聞

きいただきます。

私も一人ひとりの人生の始まり。それは、誕生ということが原点です。一人ひとりにとって一番掛け替えのないありがたい日というのは誕生日であります。

お正月になると、みんなも大みそかまで家族で口げんかしても、何となく心改まって元日を迎えると、「おめでとうございます」「おめでとう。今年もよろしく」とあいさつを交わします。

しかし、一人ひとりにとって、元日にもまして尊いのは、何月何日という生まれ月日、それが尊いわけです。亡くなるということはつらいことで、寂しいことです。しかし、そんなにつ

らく悲しいことなら、その人が一年一年、年を重ねている時に、どれだけありがたいこととして、うれしいこととして喜ばせてもらっていたかということをお祈りしなければいけないと思うんです。逆に一年一年のその誕生日、年を重ねるということをお祈りして喜ばせてもらっていたかということが大事なわけでございます。

私は昨年の12月で70歳、古希を迎えました。教祖様と同じ年までお生かしいただいた。もったいないことだと思っております。父は64歳で亡くなっております。実母は28歳で亡くなって、継母は67歳で亡くなっています。区民検診なんか行きますと、いろいろ検査結果の数値が出る。「その年でこれならありがたいですね。親に感謝しなければいけませんね」と言われます。感

謝すべき両親はいないわけで、御霊様に対してありがたいございましたというようなことで、親の年を越させていただき、また教祖様と同じ年までお生かしいただいてもつたないことだと思わせていただいております。

私には娘がいますが、この娘が生まれるのは連れ合いの実家近く、岡山の田舎の産院でした。なかなか予定日を過ぎても陣痛が起きずに、10日ほど予定日から延びました。そしてようやく自然分娩ぶんべんで生まれさせていただいたんですが、やはり難産だったせいか、赤ちゃんの具合が少しよろしくない。それで、すぐに町の方の総合病院、小児科のあるところへ搬送しなければいけないということになりました。

連れ合いの方は1週間ほどで退院させてもら

いましたが、娘の方は総合病院の小児科で2週間お世話になった。その間どうしたかといいますが、母乳を絞って、それを凍らせて、総合病院に運んで、そこで解凍して人肌くらいに温めて、ほ乳瓶で母乳を飲む。そういうことを実家の家族がいろいろと手伝って世話をしてくれました。

私はそのことがすごくありがたいこと、忘れてはいけないこととして、娘も少しずつ年を重ねて小学生くらいになると、「あなた、こうだったんだよ。ああだったんだよ」と申すようになる。そして誕生日のお届けの時には、「あなたはこのことを忘れてはいけないよ。誕生日のお届けを自分でしなさい」というふうに言うわけですが、「またこの話か」と、子どもの方は

いわゆる耳にたこ状態。耳にたこでもいいから、とにかく確認しなくちゃいけない。自分の生の原点、それをもう40回ほど、40年間折に触れて、とりわけ誕生日の時は申してきているようなこととです。

ご信者さんにも私は、「とにかく1年の中で一番ありがたい日、大切な日は誕生日ですよ」と申しております。そういう中で、「ああ、本当にそうだなあ」と実感された方、ご家族、お子さんお孫さんに至るまで20人ほど、月々のお参りの時にその方の名前を書かれて、「今月は誰々の誕生日です。ありがとうございます」「今月は孫の誰々の誕生日です。ありがとうございます」「誕生日を迎えられないということは、そこで終わりということですから、逆に誕生日



を迎えるということがどれだけありがたいことかというのを、やはりその方なりに確認をしておられるわけです。

いかがでしたか？

皆さんは自分が生まれた日のことをどこまで知っていますか？ 安産で元気に生まれてくるだけでも、大変なことですよ。そこに関わってくれた両親や家族、お医者様や看護師さんをはじめ、様々な方々の支えがあつて私たちは生まれてきます。そして、そこには神様やご先祖のお守りもあるに違いありません。

皆さんも、ご両親やご家族、関わりある方々に、自分の生まれてきた時のことを尋ねてみませんか？ そこには思いも掛けない事柄や発見

があるかもしれません。

そうして今日の自分があることにお礼を申し上げる中で、ここからの人生に新たな糧が生まれてくるかもしれません。

どうぞ、ここからのあなたの人生が幸せでありますように！



# KONKOKYO

## 金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール [w-master@konkokyo.or.jp](mailto:w-master@konkokyo.or.jp)

**ニッポン放送** 日曜日 あさ4時30分

**東海ラジオ放送** 金曜日 あさ5時25分

**朝日放送** 日曜日 あさ5時40分

**RKB毎日放送** 日曜日 あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

